

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.154



碧梧桐と虚子

秋尾 敏

秋尾敏です。千葉県で「軸」を発行しています。県の役員として、この大会に何度かお邪魔したこともあります。叔父が羽村の歯科医でしたので、子どものころ多摩川や福生の街でよく遊びました。多摩は懐かしい場所です。

さて今日は碧梧桐と虚子の関係を、二人の俳句でたどっていきましょう。

明治二十七年

桃さくや湖水のへりの十箇村

春雨の衣桁に重し恋衣

碧梧桐
虚子

六月に第三高等学校が改組となり、二人は仙台の第二高等学校に転学となります。その別れの句会での句です。古典を踏

まえて京都の風情を詠んでいます。まだ自分を詠んでいません。

明治二十八年

春寒し水田の上の根なし雲

夕立やぬれて戻りて欄に倚る

碧梧桐
虚子

二人はすぐ二高を退学し、東京の子規庵に転がり込みます。子規は清国に取材に行きますが咯血して帰国。虚子は神戸病院、須磨保養院と子規を介護します。この句は自分を詠んでいます。

明治二十九年

赤い椿白い椿と落ちにけり

炬開いて灰つめた火の消えんとす

碧梧桐

怒濤岩を噛む我を神かと朧の夜

虚子

海に入りて生れかはらう朧月

新調の句です。「大阪毎日新聞」の岡野知十に「青年俳客の口吻」と評された句調です。

明治三十一年

芭蕉忌や淋しいほどにうづくまる

逡巡として繭ごもらざる蚕かな

碧梧桐
虚子

前年、碧梧桐が入院している間に、親しかった下宿屋の娘と

多摩風土記（豚を飼った村）

町田市域では豚の飼育が盛んであった。現在は町田市内となった旧堺村での養豚の起源は、『堺村誌』等によれば、明治一〇年に一英人が神奈川県鎌倉郡下柏尾村にホテルを経営し、そこで豚肉の加工の影響を受け各地に飼育された。堺村では明治一二、三年頃、青木芳斎という人が初めてヨークシャー種を飼育しはじめたと伝えられているという。（小山健介）

虚子が親しくなり結婚してしまします。二人の複雑な胸中が詠まれています。虚子は子規の手引きで東京版「ホトトギス」を創刊します。子規は虚子に生活の手がかりを与えたのです。

明治三十三年

火鉢買うて灰を買はざる一日かな

遠山に日の当りたる枯野かな

碧梧桐
虚子

この年あたりから、二人の句の個性が際立ってきます。碧梧桐は自分の生活や思いをありのままに詠み、虚子は思いや心象を象徴的な景に託します。

明治三十五年

主人なき庭なれば野分吹き荒らせ

長き根に秋風を待つ鴨足草ゆきのした

碧梧桐
虚子

九月十九日に子規が歿します。その極限の状況で、碧梧桐は「こと」を詠みます。虚子は「もの」を詠みます。

明治三十六年

温泉の宿に馬の子飼へり蠅の声

秋風や眼中のものの皆俳句

碧梧桐「温泉百句」
虚子

碧梧桐は俳句の可能性を広げようとし、句を複雑にしています。虚子は初心者を意識し、分かりやすい句を目指します。虚子は碧梧桐のこの句を主題が分からないと批判します。碧梧桐はそれを認めつつも、やがてひとつのテーマを詠む俳句を捨てて「無中心」の俳句を目指し始めます。

明治三十九年

思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇

碧梧桐

碧梧桐は新聞「日本」の選者となり、新しい俳句を広めるた

めに『三千里』の旅に出ます。日々の「一日一信」は新聞「日本」に連載されます。句は仙台の句会での作で、十二年前の退学を文学への出発だったと考えているような句です。大須賀乙字が評論「俳句界の新傾向」でこの句を褒めたため、以降この時期の碧梧桐の句は「新傾向」と呼ばれるようになります。

北風や碓うしの中の別れ道

碧梧桐
虚子（新年会）

『三千里』の旅は厳しい旅でした。吹雪の青森を徒歩で進むのです。しかも、勤めていた新聞「日本」が分裂し、碧梧桐の原稿も数日分が失われます。しかし、すぐ雑誌「日本及日本人」が発行され、連載はそちらに移ります。まさに「別れ道」にいた碧梧桐だったのです。

一方、虚子は小説への意識を高め、俳句は入門者を増やす方向に進みます。虚子にとっては、俳句を日本人全員が参加する国民文学にすることが重要だったのです。

明治四十一年

碧梧桐は、一月二十九日付の虚子宛書簡で、虚子の句が月並調になっていると非難します。「月並は我々生涯の敵である。其敵に兜をぬぐやうな失敗を醸す事は、始めからやらんがよい」というのです。虚子も少し考えたのではないのでしょうか。この年の虚子の句は優れたものが多いと思います。

金亀子擲なつ闇の深さかな

虚子

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

これなら碧梧桐に月並とは言われないでしょう。

風や俳魔の詛のろふ美濃の国

碧梧桐

『三千里』の旅は、旧派を新派に囲い込むための旅でした。まだ地方には旧派の宗匠が数多活動していたのです。美濃は田舎蕉門と呼ばれた美濃派の本拠地でした。

明治四十二年

謀り事漁夫より漏れて鳴く鴨か

碧梧桐

再び俳句への意識を高めたかに見えた虚子でしたが、四十一年の十月に「國民新聞」に移り、部長となって「國民文学」欄を開設します。虚子句集『五百句』に明治四十二年から大正元年までの句はありません。そうした虚子の動きを、碧梧桐は疑念を持って見ていたのかもしれませんが。

明治四十三年

泥炭舟も沼田処の祭の灯

碧梧桐

「ガシ」はその地方の言葉でしょう。言語学者のソシユールは中央文化の標準的な記述言語を「ラング」、個人の言葉を「パロール」と定義して区別しました。この「ガシ」は地域生活者のパロールでしょう。碧梧桐は旅で各地方のそうした言葉を採取していきます。

明治四十四年

虚子は「ホトトギス」一月号の「歳旦辞」に「子規居士を中心としてゐた「我等仲間」なるものが、其の個人／＼の思想、境遇等の変化、発達より其形態を解くに至つた」と記し、「松山派の解体」を宣言します。その結果、全国から「大正ホトトギス派」と言われる鬼城・水巴・普羅・蛇笏・石鼎などの才能が集まるようになります。これは古典に向かう鳴雪や、碧梧桐の新傾向俳句との決別でもあったのです。

大正二年

従峰のむら暗れに雷名残して
春風や闘志いだきて丘に立つ

碧梧桐
虚子

碧梧桐は登山に夢中です。自然主義文学者として生きているのです。一方、虚子も俳壇に復帰。二人とも充実しています。

大正三年

遠く高き木夏近き立てり畳む屋根に
鎌倉を驚かしたる余寒あり

碧梧桐
虚子

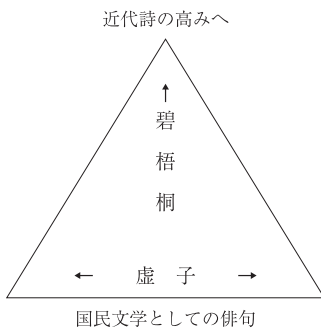
碧梧桐は五七五の細分化に向かい、五五三五・五五五三などの句を詠み、やがてそれが自由律になっていきます。

虚子はこのころ主観重視で、村上鬼城の境涯俳句が「ホトトギス」の巻頭を度々飾ります。

この後、碧梧桐は短律の自由律（短い俳句）からルビ俳句へと向かっていきます。虚子も関東大震災を経て主観重視の境涯俳句を捨て、客観写生から花鳥諷詠へと向かっていきます。

まったく趣の違う二人の俳句ですが、この二つの流れがあったことが今日の近代俳句を作りあげたのです。下図のように、俳句には、それを広げようとする力と、時代の先端の表現を目指す力との二つが必要なのです。

（令和六年十一月四日東京多摩地区俳句大会講演）



あけぼの集

青白き富士への入日湖凍る八王子青木 隆
 春の泥投げ込み寺の無縁仏八王子赤野 四羽
 寒木瓜やひとり歩きの安からむ国分寺秋山ふみ子
 福笑ゴリラの顔はこんなもの多摩足立喜美子
 終末時計ゼロになる日も耕せる小平安達 昌代
 気がつけば鳥の声する二月尽清瀬穴原 達治
 雪催いスマホに仕舞う時刻表稲城新井 温子
 春浅し身の内の癌宥めゐて八王子荒川勢津子
 四温晴まっすぐ行くための杖なり町田有坂 花野
 崩壊の忿怒に咲いた黄水仙狛江有原 雅香
 年明けの異土にしずむ樹木葬国分寺安西 篤
 物忘れ外来結果五月晴東久留米飯田 玉記
 二月の肉まんもせんべいもハート多摩石川 春兔
 芽明りやファルセットの息づかい小平石橋いろり
 湯疲れに気づく齢や春の宿練馬石原 俊彦
 咲きかけのマンサクの花おさなの手八王子市川 春蘭
 煌めきて水に還りぬ薄氷青梅一ノ瀬順子

タピオカとグラスの底へ春の雪日野一関なつみ
 不揃ひの春菜電動自転車走る狛江伊東 類
 花粉症宙ぶらりんの自尊心町田稲吉 豊
 トランプにジョーカーいない四月馬鹿町田今田 述
 遠近法近江の春愁かき混せて京都岩佐ひすい
 潮騒街騒森騒風薫る武蔵野内田 牧人
 八十年戦死なき国福寿草武蔵野江中 真弓
 木の根明く夜には星の匂いせる府中大井 恒行
 透明な息して涅槃図を見たり府中大石 雄鬼
 点滴を外す病室うらけし日野大槻 正茂
 千羽鶴春日に幾重の小祠かな八王子大谷みどり
 春という時計を軽く腕に巻く川崎大西 恵
 統合で校歌消えけり春時雨三鷹大森 敦夫
 音速ミサイル桜前線異状あり昭島岡崎たかね
 春風やホープの空き箱転がれる羽村岡村 直子
 バス停の列のゆるみや春深し三鷹小川 紅子
 トランプゲーム柴犬向かう春北風三鷹小川 葉子

あけぼの集

冬の日や日差し求めて干物し飯 塚奥野 亜美
 鶯の声数へつつ谷戸の道川 崎尾崎 太郎
 薄氷や覗く水面の細き影昭 島尾関 英正
 坂多き街ふりむけば春浅し青 梅小野こうふう
 春寒や指にくつつ最中の皮立 川片倉みちこ
 龍太忌や中央線の句の幾つ昭 島亀津ひのとり
 梅まつり駆け廻りたい吉野郷 西東京河 順子
 未来へと己れを遺す初句会立 川川島 一夫
 雪柳風で生まれし赤子の手清 瀬神崎 幸子
 一つ覚え二つ忘れてペンペン草小 平城内 明子
 恋猫を引き連れ虎の檻の前熊 本貴田 雄介
 着慣れぬ制服背を押す東風優し大 田小泉満知子
 淑気乗せ廻る水車や深大寺三 鷹高坂 栄子
 若葉して大きな雨の木になりぬ立 川幸田 晋
 よなぐもりウズベキスタン横断す小 平後藤 行雄
 海苔あぶる母の手ひらり晴天です府 中小林 育子
 千本の裸木忽とサグラダ・ファミリア あきる野 小林マリ子
 春節や人の背中と広東語町 田小山 健介

わだつみにロザリオ散りし二月尽立 川齋木 和俊
 人日のシミひとつなき割烹着多 摩齊田 仁
 竈猫こころに鬼を飼ひ慣らす昭 島坂本 空
 今日もまた朝ヨガしてる生きている 小金井櫻 さとみ
 さみしくなつてたんぼの絮とばす 東久留米 佐々木克子
 狭庭から一寸法師の路の臺府 中笹木 弘
 スプーンが触れて口開きあたたかし調 布佐藤 茉
 降れ降れと大地が囁す春の雪昭 島佐藤 光子
 寒晴れや窓を横切るメジロ二羽八王子柴 れいこ
 春めくや起伏ほどよきオムライス杉 並島 彩可
 春近しアナウンサーの白い衿 国分寺 島田 澄子
 飛梅の日本遺産に涙する足 利清水 弘一
 愛と哀背中あはせや春の墓 世田谷 鈴木 浮葉
 午後雨と予報出ている冬の雲立 川鈴木かずえ
 春立つや木の葉きらきら笑いおり小 平鈴木 寿江
 ブランチのセロリシャキシャキ春を噛む 小金井 鈴木 佑子
 娘の温みほのと残りて初鏡板 橋諏訪部典子
 春の夜やS N Sの打ち言葉小 平関 梓

あけぼの集

風花や不眠のキリン立ち上がる調 布 芹沢 愛子
 ジルバはもう踊れないのね春の波小 平 高瀬多佳子
 春耕す土はやさしと能登の母 西 東京 高原 桐
 戦後八十年太郎の窓に風光る清 瀬 谷村 鯛夢
 いつまでも戻ってこない福は内 国 分寺 玉井 豊
 春光浴び貌も解きはぎ背伸びする 稲 城 玉木 康博
 はははハナ吾を彼岸に産み逝けり日 野 玉木 祐
 雪女英語露西亜語修得す立 川 田村 明通
 マーラーのかくもやはらか桃の花三 鷹 田山 光起
 忘れ物のやうに雲湧く建 国 日 武蔵野 津久井紀代
 冬の夜諍いし後の鏡拭く八王子辻 升 人
 春浅し腹むき出しの武甲山かな清 瀬 寺島美美子
 大船を曳きゆく小船春の雲立 川 遠山 陽子
 リビングに笑い溢れる女正月 西 東京 戸川 晟
 春隣真昼がふくらんでくる杉 並 飛永百合子
 炒めたる大根の葉の旨さかな清 瀬 永井 潮
 犬ふぐり見つけて好きな道となる立 川 中條 啓子
 春一番人生時時急登攀 西 東京 中田とも子

背筋凍つホロコーストの遺品の嵩 国 立 中野 淑子
 一人居や所在なき時蜜柑むく座 間 長野 保代
 青々と流るる雲や春立ちぬ 武蔵野 夏目 重美
 戦来て春なのに春来ない 国 町 田 成戸 寿彦
 国境の壁年収の壁春の泥 国 分寺 南行ひかる
 葦芽ぐむ湧水へ鷺一歩づつ 西 東京 西川 五月
 春や春長女もうすぐおばあちゃん 世 田谷 西前 千恵
 初嵐川崎競馬荒れやすき 昭 島 西村 智治
 付け待ちのタクシーとりどりの落葉着て三 鷹 拔山 裕子
 尼寺の辻に名残の雪だるま 八王子 沼田 博古
 陽春やあやつり人形踊りたり三 鷹 根岸 敏三
 防人も見し白梅の矜持かな三 鷹 根岸 操
 春泥は工事はじめの合図能登小 平 野口 佐稔
 面食ひは親譲りなりうかれ猫羽 村 野島 正則
 春光を一気吞みする大水車 青 梅 萩原 美沙
 朝日差す凍滝見せる豊満さ 武蔵野 蓮見 徳郎
 白魚の一尾一尾に眼のちから 小金井 平井 葵
 花種を蒔いて何やら使命感多 摩 平山 道子

あけぼの集

雛菊にいつも会へると思ふまじ 八王子 広井 和之
 畳屋が来て正月を置いてゆく 調 布 藤原はる美
 花冷の肌にしむや身八口練 馬淵田 芥門
 木の根明く一人芝居に草臥れて 国 立前田 弘
 のどけしや小さな窓が丁度いい 国 立前田 光枝
 早春の農夫一人の大地かな 国分寺 松井 彰子
 物の芽のぞくぞくぞくぞく 雑木山 八王子 松元 峯子
 ノッポビル春二番に挑戦か 東久留米 三池 泉
 長居してカフェオレ冷める浅き春 東久留米 三池しみず
 仏壇に手あわせ祈る孫受験 東久留米 三浦 禎三
 春風やルビは無用の一行詩 小金井 三浦 長閑
 実印を捺すごと歩く雪の道 世田谷 三浦 文子
 ふとアンドロイドの眼差し春の窓 町 田 三木 冬子
 種物ややさしい父の下手な文字 東大和 水落 清子
 一番星見しや絵踏の人たちも 三 鷹 水野 星間
 寒晴の彼方へ出奔してしまふ 日 野 満田 光生
 今の事いまずぐ忘れ野蒜摘む 昭 島 宮腰 秀子
 退職や春という椅子探す旅 調 布 宮崎 斗士

雪空の中に落暉の急ぎけり 国分寺 武藤 幹
 如月の猫の日ピアノコンサート 小金井 村井 一枝
 殉職の勲章かろし春の雪 岐 阜村山 恭子
 生きている証のひとつ春の風邪熱 海望月 哲土
 竜天に登る地に追悼の旗無数 東村山 森本由美子
 梅咲くや重力を悲と思うとき 三 鷹 守谷 茂泰
 寒い朝見上げる空が真つ青に町 田 山崎せつ子
 葉がぐれに古里おもう紅椿 府 中山本 徳子
 老憩うベンチの下で草青む多 摩 山本みつし
 白梅の甘き香りを廃屋へ調 布 豊 宣光
 自転車に自転車もたれる春夜稲 城 好井 由江
 春淡し硝子戸磨き人を待つ三 鷹 吉川 真実
 おぼろ富士浅間神社の神のもの 東久留米 吉平たもつ
 散歩道花芽の挨拶うれしかる 国 立 吉村春風子
 願はくは大船渡へも春の雨 町 田 米倉 信山
 うららかや顔認証に背伸びして 立 川 米澤 久子
 アバウトに生きるちふ妻糸編む 小 平 我妻 民雄
 柳絮とぶ落つるはどこも敵地なり 青 梅 渡部 洋一

青木 一郎
鯉起し富山の海はけたたまし
柴 れいこ

能登半島地震の復興が順調には進んでいない中、冬の到来で厳しい日常を送っている人がいる。晩秋から初冬の寒気の影響で鳴る雷は寒鯉のシーズンに合わせて鯉起しという。雷の音のけたたましさと富山の海のけたたましさが合せられて心に残る。

赤野 四羽

二十億光年の旅鶴渡る

玉木 祐

谷川俊太郎氏が亡くなされた。『二十億光年の孤独』は氏の処女詩集だ。毀誉褒貶はあろうが、現代詩の巨人であることに異論はないだろう。圧倒的な詩の山脈を、鶴のように飛び越えて行ってしまった。これからの日本の詩はどこに宿るのだろう。

秋山ふみ子

書を閉づる冬三日月を朧とし

平山 道子

冬の夜、読書に耽る作者。今日はこまどと本を閉じる。ふと窓を見ると夜空には冴え冴えとした三日月がかかっている。上五から中七への転換が見事です。又、冬三日月を朧に見立てる感性が素晴らしいと思いました。心に残る一句となりました。

安達 昌代
俳歴というか海鼠が増えている
宮崎 斗士

暗喩としての「海鼠」が秀逸である。俳句というものの得体の知れない奥深さを言い得て妙なことは勿論だが、その未知なる可能性までも示唆しているように思う。目の前の不思議な一句が百年後、人々の心を鷲掴みしているかもしれない。

新井 温子

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

「その日まで」に、いろいろなその日を想像しました。やはり人生最後のその日までと読ませていただくのが自然ではないのかと。その日を我が家で迎えられるのは、とても幸せなことだと思います。作者の心構えが感じられた一句です。

荒川勢津子

噓して正論分裂してしまふ

松元 峯子

話題は何なのだろう。ウクライナ侵掠か、和平工作か、真理を全力で論じ、盛り上っている最中に、突然の大噓！話の腰が折れ気合が抜けてしまった。場の緊張感が薄れた様子、滑稽味のある御句。

有坂 花野
俳歴というか海鼠が増えている
宮崎 斗士

団塊の世代の村上春樹流に言えば、増えて何が悪いと海鼠はおもうだろうか、と少し可笑しくなった。下戸だし海鼠など金輪際食べる機会はないだろうが、この世がどんな事になっても一匹ぐらいいは残るかも知れないし。

石川 春鬼

山茶花やひとり夜道のよりどころ

山本ひまわり

駅からのバスを降りて家までの帰り道。公園を突っ切ると近道だが、夜は人影もなく心細い。先を急ぐ自分の靴音だけが大きく響く。公園内に咲く山茶花の紅は道標のようだ。作者は思いがけず知り合いに会えたような気持になり、肩の力が抜けたのだ。

石橋いろり

能面の裏より明る晩夏光

高原 桐

能面には翁、老人、鬼神、女、怨霊、男等あるようだが、どれも目の大きさは直径1cm程の小さな穴。面をつけ急に晩夏光が入ってきた驚きを詠っている。歌舞伎は好きだが、能は敷居が高い。能面師の画廊を訪れた時、付けさせてもらえばよかった。

稲吉 豊

少女漫画の瞳きらりと十三夜

満田 光生

漫画はあまり読まない。ましてや少女漫画は縁遠い。しかし、あの世界のヒロインの瞳は大きくていつも南十字星のように光っている印象がある。現代娘を伝統の十三夜に配し、新しい恋の始まり(?)を描く斬新な切れ味。

岩佐ひすい

さびしさをかたちにしたら冬桜

鈴木 佑子

寒さの中に咲く冬桜。慰められたり心安らくなったりします。父は気難しさで長男と生活することが難しくなり、我が家に2年程暮らして亡くなりました。でも本当は仲直りしたく、じつと冬桜を眺めていた姿がこの句から思い出し、胸に迫ります。

江中 真弓

咳ひとつ奥に怒りを含みをり

片倉みちこ

怒りに堪えている胸苦しさに出てしまったのか、重い気分を払拭しようとしてなのか。たつた一度の「咳」から、微妙な心理と怒りを感じ取っている、作者の感覚の鋭さに瞠目する。言葉であれこれ述べる以上の、深い怒りが伝わってくる。

大西 恵

冬桜無実の獄に半世紀

永井 潮

冤罪で死刑囚とされていた袴田巖氏は昨年十月に無罪が確定した。三十歳だった一九六六年に逮捕されてから五十八年後のことだ。冬桜は袴田氏に優しく微笑みかけている。その美しさは長期にわたって人権を奪った者たちの醜さを際立たせている。

岡崎たかね

年の瀬や復活目指す能登の塗師

青木 隆

漆塗は日本の文化。漆師達も誇りと覚悟をもって伝統を守る。大震災による壊滅的被害にも塗師の決意はゆるがない。今、求められるのは公的支援。要求があがる前に伝統産業に生きる道を保証するのが国の責任。漆は英語でjapan (ジャパン)。

岡村 直子

はやはやの飯にバウンド寒卵

我妻 民雄

はやはやのオノマトベと、バウンドが響き合う。毎日の食卓に登る定番の卵が、希望に輝く魔法の食べ物にも見えてくる。季節が巡って来ても、毎年同じような感慨し密が知りたい。

門野ミキ子

神の旅まじめな雲が付いて行く

前田 光枝

神達が出雲に参集する十月、神は旅に出る。作者は流れる雲を神様に付いて行く真面目な雲と見た。真面目な雲とは面白い。では不真面目な雲はどうしているのだろうか。神の留守をこれ幸いと羽目を外しているのかも知れない。物語が出来そう楽しい句。

亀津ひのとり

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

その日、多分最期の日まで暮らす、(という意味)であろう我家を、この家と言いつ、そこに偶々小鳥が来た、或いはいつものように小鳥がやって来た。その日、この家の指示連体詞?が効果的に作者の深い思いを表出して、小鳥来るの季語が効果的だ。

河 順子

日脚伸ぶ雑木林に耳澄まし

尾崎 太郎

春の訪れを、真つ先に発見したい作者なのでしよう。葉を落とした寒林には、新しい芽の用意が、密かに用意されています。明るい陽の光を感じた新芽が、少しずつ頭を出して来る頃、小鳥たちも覗きに来て、かわいい囀りが、作者の耳に届きます。

川島 一夫

どの窓も明日を見る窓冬夕焼

城内 明子

どの窓も何の変哲もない窓だろう。ただ作者の中では大切な窓なのです。心の中の窓のようなもので光を見たり、世の中の様子を見たり、明日の未来も見るとそれは作者の意思の窓とも言える。その窓が今日は冬夕焼なのである。明日を見る窓は至言。

後藤 行雄

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

まだ、先のことが、それとも明日か。誰にでも、「その日」はやってくる。願うのは「その日まで」自分らしい暮らしができるということ。たとえ、一人の生活であっても、小鳥たちが訪ねてくる。

小山 健介

錦秋にボチと呼びたし埴輪いぬ

玉木 康博

昨秋は挂甲の武人国宝指定五十年にあたり、埴輪の特別展示が行なわれた。展示された犬の埴輪は見るからに日本犬で、思わず「ボチ」と呼びかけた作者。挂甲の武人も「ボチ」と呼んでいたのだろうか。読むほどに想像が広がって来る。

笹木 弘

色づいて鉢に小さい秋が来た

鈴木かずえ

鉢植えの木の種類は解りませんが、紅葉が直ぐに浮かんできてくる。そしてこの句の場合、ある程度色付いたのを見て、小さい秋が来たことを実感したのである。それと同時に、童謡の「ちいさい秋みつけた」の歌が、優しく聞こえて来るような気がした。

佐藤 栄子

冬晴やだったん蕎麦の胡桃汁

石川 春兔

だったん蕎麦？友達に聞き、スマホを引いたら元々はモンゴル、中国地方の蕎麦で今は北海道、長野でも栽培される。ポリフェノール（認知症になりにくい）と胡桃の香ばしさを一緒に食した。「冬晴」だからさぞ美味に違いない。食べてみたくなった。

柴 れいこ

冬の虹消えて心にたたむ彩

飯田 和子

なかなか見ることもない冬の虹。何かいいことがありそうな気がする。その想いをそつと心の中にとどめておきたい。「心にたたむ」の言葉がとてもひびきました。きれいさとやさしさ、それに幸せを感じさせにくれた一句です。

鈴木 浮葉

秋の蚊が握り拳の中にいる

新井 温子

昨年は酷暑過ぎて蚊も少なかった。秋になつてようやく出て来た。憎き蚊ではあるが捕まえてみると複雑な感情。作者は手の中で刺されて痒痒いのだろうか。潰すしかないけれど生類憐れみの情、何だかなあの気持ちでもある。

鈴木 寿江

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

生れてからその日まで……。その日には入学、卒業、就職、等々。しかし私は高齢者なので人生の最後を考える。四季折々の花が咲き、春になれば小鳥が来る。そんな素敵な庭に囲まれた家で生涯を終える。なんと幸せな事でしょう。

諏訪部典子

さびしさをかたちにしたら冬桜

鈴木 佑子

天逝した娘の眠る墓地の入り口に冬桜があります。娘が逝った当時は悲しみだけで目に入りませんでした。目に止まるようになったのは三、四十年経って悲しみが寂しさに変わった頃からだと思います。私にとって、「さびしさのかたちは冬桜」です。

徳山 優子

書を閉づる冬三日月を朧とし

平山 道子

なんと美しい詩的な表現かと思いましたが。「書を閉づる」から始まるのもワクワク感があり、素晴らしかったです。

さらさら輝く冬三日月が見えてきます。こんな葉を使ってみました。

飛永百合子

紅をさしかぼちや煮抱え母来たる

小泉満知子

いわゆるスーパの冷めない距離に住んでいると思われる。お洒落なお母様はちよつとした距離でも口紅をさすのである。ホクホク熱々のかぼちや煮を抱えて、羨ましい。どうぞお母様との時間、おしゃべりを大切にして下さいね。心暖まる一句でした。

中條 啓子

神の旅まじめな雲が付いて行く

前田 光枝

神々が出雲へ旅立つ日。青空には鯛雲が連なる。

雄大で、すがすがしい光景だが、浮かれ気分の神々と、大まじめに付いて行くいいらしい雲の姿も浮かんでくる。

おおらかなユーモアが心地よい。

夏目 重美

秋の蚊が握り拳の中にいる

新井 温子

十七音の余韻に心を打たれる。人の血を吸い、逃げ足の速いあの憎い蚊が、容易く己の拳の中にいる。秋の蚊の衰えと万物の無常を巧みに重ねている。蚊は未だなお拳の中に生きている。

成戸 寿彦

生家なき里は遙けし花八手

尾関 英正

一読、共感を呼びました。勤めを持つているところは忙しさに紛れ、それを言い訳にしつつも、心の中に古里は存在していました。しかし距離はかりではなく、時も「遙かな」ものになってくると、心に浮かぶのは玄關脇にあった花八つ手だけです。

南行ひかる

ずれてゆく話の先の「平和」かな

武藤 幹

無季句ですが何故か惹かれました。鍵括弧がヒントでしょうが、読み解きは難しい。話がずれてゆくけれども穏やかな平和な景、つまり介護的な句なのか、議論がずれるが故に真の平和が来ないのだ、との詠嘆の時事句なのか、その何れでも無い。

西村 智治

ホモ・サピエンス無季も耕してきた

川名つぎお

昭和三十年代、四十年代と俳人達は血刀をさげて戦ってきた。昭和五十年代以後は、それは俳人個々のなかで、静かに行なわれている。耕すとは、そういうことでもあるのだろうか。しずかな一句に見えて、古豪なかな、さかんである。

坂山 裕子

冬夕焼け自分がいつも誰かのよう

芹沢 愛子

キリッと晴れた日の冬夕焼け、どんよりした雲を被った日の夕焼け。その温もりの違いが微妙に心に影を造る。花の色、風のそよぎに昨日とは違う自分の心を見る。人は自分の中に思いがけない自分を見ることがあるのです。

野口 佐穂

神の旅まじめな雲が付いて行く

前田 光枝

出雲に集まる神様の旅に雲が付いて行く。ただし、付いて行くのはまじめな雲だけだ。その雲以外のものは、この時とばかり羽根を伸ばす。俳諧的なおかしさと柔らかな批評性、そして読み手に対し、あなただけは？と問いかけてもいるように楽しい。

萩原 美沙

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

御子様達も独立され、想い出の詰まった家に一人で生活されている作者。毎朝来る小鳥たちに声をかけ、心癒されながら、「よし今日も頑張ろう」と前向きに生きていらつしやるご様子。人生百年と言う現在、お互いに元気で晩年を謳歌致しましょう。

平山 道子

鯛焼に程よく詰まる人類愛

森本由美子

過ぎし昭和五十年頃「およげ！たいやきくん」という童謡がヒットした。そのストーリー性に魅かれて大人も口ずさんだ。鯛焼の誕生は明治時代とのこと。庶民に長く愛されてきた温かい甘さと愛嬌ある姿は人類愛そのもの。心に響く共鳴句である。

藤原はる美

冬桜無実の獄に半世紀

永井 潮

袴田事件のことでしょう。冤罪で死刑囚にされた恐ろしい事件でした。警察の杜撰さ、人が人を裁く難しさ。他にもこの類の事件はいくつもあるでしょう。ただ救いは最後まで弟さんを信じて闘ったお姉さんの強さ、感動しました。

淵田 芥門

寂しさや能登霜月の水平線

市川 春蘭

上五に敢えて心中を曝け出し、中・下は時と場の景だけをただ描く。初冬の海の物寂びた風情に、切迫した感情は此地への哀悼の情でもある。千里浜からか輪島からか、渺茫たる海の果てに、さらでだに秋思に浸り寒々とした人生の孤独も表現する佳句だ。

松元 峯子

どの窓も明日を見る窓冬夕焼

城内 明子

窓から外を見る。景色や日射しや雨の降りや。我が家の台所の窓からは夕焼が見える。冬夕焼は赤々と美しい。そうか。私は明日を見ているのだ。明日があるのだ。作者の生への力強さを感じた。季語の冬夕焼が、晩年を暗示し、一句を彩っている。

三池しみず

もめごとを丸めてしまいかまど猫

大西 恵

ペットのいる生活の素晴らしさを表現した佳句です。人間はどうしてもストレスにさらされてしまいますが、動物はいつも心を癒してくれます。起きている時も寝ている時もその姿はかわいらしくて優しい気持ちにさせられます。

三浦 禎三

晩秋の十和田湖怖いほど静か

飯田 玉記

湖は季節及び行く時間帯でその景色が異なります。河川の源である湖は、人の心を動かす何かを秘めています。特に十和田湖は奥入瀬溪谷の源であり神秘的な湖です。観光客も少なかったのか、波静かな水面に向き合い「怖いほど」の感性が素敵です。

三浦 文子

小樽からの短い手紙雪明り

前田 弘

短い手紙には思いが簡潔に込められる。降り積もった雪が辺りの光を反射して夜の闇をほんのりと明るくする雪明りのような作者の感慨が深く思われた。掲句にふれ港町小樽の無数のスノーキャンドルによる雪明りイベントを訪れたことを思いだした。

水野 星闇

兜太笑む銀杏並木の日矢太し

村山 恭子

兜太さんが存命中に、一度某会合でそのお体を支えたことがあった。がっしりとしたその体躯は、さすがに戦中派の典型で、感銘を覚えた。掲句は座五の日矢太しが、しっかりと句全体を支えている。笑顔の素敵な兜太さん、銀杏並木は母校の東大か。

彗星は夕空の笛冬近し

武藤 幹

守谷 茂泰

彗星は去年の九月から十一月に良く見えた。晩秋の夕暮れ、空を駆け抜け消える彗星！この彗星は美しくも儚い！！この様を作者は「夕空の笛」と詠んだ。澄んだ高音が風に溶けて消える笛の音。その雅な美しさが納得だ！実に巧い！！見事である。

その日まで暮らすこの家小鳥来る

藤原はる美

村井 一枝

その日まで暮らすのは終の栖。人には誰にも必ずやってくるその日がある。しかしその日は誰も知ることには出来ない。それは今夜かも。作者はその日にはたんとしながら、その日を迎える確かな覚悟が感じられ、私もその思いを強くするのでした。

其れ其れの「大義」と「正義」冬ざる

南行ひかる

望月 哲士

最近の世界の政治経済の情勢を見ますと大義、正義も立場によって異なってくるということが顕著になっているように思われます。本来は決して揺るぎないものとしてあるべき筈が、そうはいかないという気持ちで「冬ざるる」でよく伝わってきます。

末尾にはふくらみ持たせ秋手紙

山本 徳子

玉井 豊

中七に作者の優しい思いやりを感じます。スマホが多い中、手紙は自筆であるだけでも温かさを感じます。手紙文化は宝です。私も親友の転居により手紙で交流しています。そして末尾にふくらみを入れて送っています。元気でねと言ひ合いながら。

神の旅まじめな雲が付いて行く

前田 光枝

米澤 久子

雲にもまじめな雲と不まじめな雲がいるのですね。仰仰しく装った旅出の神様のお供の最後尾をまじめな顔をしたまじめな雲がしっかりと守っている。余計な事は云わずに読者の想像をたくましくしてくれる俳句に惹かれました。

つっぱり棒ポトンと落ちる小春かな

高坂 栄子

渡部 洋一

つっぱり棒は、いつも肩を怒らせ、つっぱっているなければ用をなさない。時には息抜きをしたい時もある。そんな日には、人間と同じように弛んでしまう？小春を樂しむように、つっぱり棒に親近を抱いての作か。俳味のある一句に仕上がっている。

あけぼの便り

○小林育子様、三浦長閑様、吉川真実様、前号に拙句を採り上げて頂き有難うございます。とても温かな鑑賞文に身に余る思いです。

(秋山ふみ子)

○毎々お世話になります。編集部の皆様のご苦勞を思い乍ら返事が遅れて申し訳ありません。皆様のご健康をお祈り申し上げます。

(荒川勢津子)

○一五三号のあけぼの便りで、亀津ひのとり様が角川俳句大賞の合評について「対馬康子氏がこれで良いのでしょうか、と納得しない様子の対話がとても面白く感じた」とのこと。同感です。(有坂花野)

○「府中郷土の森吟行記」、掲載していただきありがとうございます。(石川春鬼)

○いろいろとお世話頂き有難う御座居ます。幹事御一同の御健勝を祈念申し上げます。

(城内明子)

○一日一日を大切にと思いつつ過ごしています。

(佐々木克子)

○伊東類様、片倉みちこ様、我妻民雄様、拙句をご講評下さりありがとうございます。

(佐藤栄)

○今年は寒波が続きますっかり出不精になっ

ています。皆さまの句を拝見しますと生き生きしていて励みになります。少しずつ外に出たいと思います。(島田澄子)

○永井潮様、前号の私の句をお取り上げ頂き且つ素晴らしい鑑賞文をありがとうございます。すばらしい鑑賞文に励まされました。(諏訪部典子)

○寒波、何度も襲来。雪国の方のご苦勞お察し致します。東京は反対にカラ／＼天気!どうぞお体お気を付け下さい。前田光枝さま、拙句ご講評いただきありがとうございます。ありがとうございました。(玉木祐)

○「多摩のあけぼの」は、あけぼの集、一句鑑賞、研究会報告、あけぼの便りとすべて充実していますね。毎号楽しみにしております。(飛永百合子)

○辻升人様、三池泉様、前号の一句鑑賞に拙句を取り上げて下さり有難うございました。(永井潮)

○大変お世話いただき有難く存じます。只今、老老介護中ですので「多摩のあけぼの」は心のオアシスです。(中田とも子)

○米倉信山様、句評有難うございました。町田市の方はいらっしゃるけど座間市はいません。日当りが取柄の田舎です。70年住んでいます。(長野保代)

○公開講演会(芭蕉の「おくのはそ道」と

漢詩文)に会員の方多数お越しください有難うございました。(夏目重美)

○水落清子様、拙句を鑑賞いただきましてありがとうございます。黒井千次さんの老いシリーズに目を通してくなりました。た。(成戸寿彦)

○坂本空様、一句鑑賞に拙句をお取り上げいただき、ありがとうございます。(野口佐愼)

○毎号読み沢山の俳句にふれ勉強になります。ありがとうございます。(松井彰子)

○庭先にアネモネの赤・紫が見事に咲いて心が癒されています。風にそよぐ風情からギリシャではこの花を「風の子」というのも楽しい。(三木冬子)

○尾崎太郎様、句評ありがとうございます。これを励みに頑張つてゆけそうです。(水落清子)

○153号巻頭の「『武蔵野探勝』を読む」(大石雄鬼氏)をたいへん興味深く読みました。百回に亘る句会記を丁寧に読み込むばかりでなく、同時期・同場所を継続的に吟行されているのには驚きです。「前半は名勝の句である時期には行っていない」「生活する人に関わる花鳥詠詠」「花鳥詠よりも客観写生、実物重視」などのご指摘に、虚子の実像をありあり

と見る思いがしました。各回の吟行の紹介も生き生きとして、目の前に様子が浮かぶようです。「花鳥詠詠」「客観写生」というスローガンを鵜呑みにしているとはわからないことを、いろいろ知ることが出来ました。(満田光生)

○寒かったり暖かったり変化の多い今日此の頃です。いろいろお世話になります。がよろしくお願い致します。(宮腰秀子)

○自己模倣に陥らぬ様、創句活動を続けてゆきたい。今年の自分への戒めである。(武藤幹)

○お世話になります。句の訂正よろしくお願致します。(村井一枝)

○岐阜から参加しており、東京多摩地区の皆さまの作品等、大変勉強になります。岐阜でも今年は雪が多く、春の気配がゆつくりとやつて参っております。お世話になりました誠にありがとうございます。お世話です。(村山恭子)

○お世話になっております。どうぞよろしくお願いたします。(守谷茂泰)

○先日、三鷹市で配布しているシジュウカラの巣箱をもらい受け庭の低木に掛けてみました。シジュウカラがやってくるのを楽しみにしています。春の楽しみがまた一つ増え、心弾みます。(吉川真実)

第12回 俳句研究会

12月14日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 水野星闇・秋山ふみ子・

玉木康博・根岸操・尾崎太郎・

大森敦夫・石橋いろり

参加者26名

★講話なし

煤逃やゆつくり探す文庫本 小山 健介
千万の落葉踏まれて日を返す 水落 清子
冬ざくら風のたよりというたより 佐々木克子
好きに泣け酒はこぼすな煮大根 稲吉 豊
ただ祈る瓦礫の中のクリスマス 松井 彰子
日記買う世界の終り記するため 尾崎 太郎
鎌鼬神も嘆をしたるらむ 幸田 晋
きつぱりと柵切り捨て葱汁 齋木 和俊
背丸め冬菜を刻む厨夫 水野 星闇
ぼつねんと冬のベンチが人を待つ 戸川 晟
水雨降るハモニカ横丁古暖簾 石原 俊彦
きりきりと青を湛へて冬の空 秋山ふみ子
風やわが熟成の進まざる 亀津ひのとり
老犬の大きな欠伸冬菫 三浦 長閑
開戦日戒厳令という言葉 青木 隆
社会鍋長き歴史の黒光り 根岸 敏三
湯豆腐や障子の外は哲学の道 淵田 芥門
葉牡丹や生まれは神戸土井たか子 西前 千恵
オスロに灯るHIBAKUSHAの祈り 石橋いろり

万物のうす墨いろの冬来たる 飯田 玉記
目葉の雫冷たや雪催 大森 敦夫
冬紅葉七面鳥の顔になる 田村 明通
銀杏散るはにわ武人の肩先に 森本由美子
人の名が喉に出て来ず冬の鵲 根岸 操
ふと香るストーブ越えて祖母の声 小川 紅子
ガチャゴチャと渋谷は変わった師走かな 玉木 康博

第1回 俳句研究会

1月11日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 大森敦夫・秋山ふみ子・

玉木康博・山本ひまわり・

石橋いろり・尾崎太郎

亀津ひのとり

参加者24名

★講話なし

相席のさても破魔矢の置きどころ 稲吉 豊
墓じまいされど故郷初山河 石原 俊彦
聞き流すことも現し世冬うらら 松井 彰子
生命線伸びていきそう日向ぼこ 佐々木克子
読経を雪が吸い込む永平寺 玉木 康博
賀状来て「第二の人生」一人の名 高瀬多佳子
片付けの部屋に冬至の陽の静か 尾崎 太郎
半世紀経て新婚に似る雑煮膳 亀津ひのとり
寒木瓜やどうにかなると思ふ日よ 秋山ふみ子
活花に万両一本加えたり 根岸 敏三
多作重ね元旦の嘘また重ね 石橋いろり

野良猫親子室外機で日向ぼこ 飯田 玉記
黒手套はめて十指や密使めく 幸田 晋
蕪村忌や雪の人家に灯入る 齋木 和俊
リビングに笑い溢れる女正月 戸川 晟
初明り壁には舞わぬ翁面 小山 健介
冬の暮靴の数みて膳支度 小川 紅子
一月や十日を過ぎてオムライス 大森 敦夫
賀詞交はす小路に脂粉にほひけり 淵田 芥門
吾子歩め梅は咲いたぞ二三輪 三浦 長閑
霜降りて背に手に工具列の黙 山本ひまわり
声高きキッズスマホの初電話 根岸 操
土産買うフワリ背中の温くなり 櫻 さとみ
植栽の小さな名札春立てり 関 梓

初夏の吟行(五月三日・武蔵国分寺跡)

—— 吟行地こぼれ話 ——

吟行コースに伝鎌倉街道がある。鎌倉に繋がる道は多摩の^{かみつ}上道・渋谷、古河の^{なかつ}中道・隅田川沿いの下道の三本。その上道(京都寄り)は新田義貞が南下したことで有名。新田の庄(高崎)から、小手指、久米川、武蔵府中、分倍河原へと。地形的に上道は高台を通るため上流の川幅は狭く軍勢も徒歩でも渡れ、一番勝手が良かったよう。
(いろり)

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。【意見幹事担当】

「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩」へと進んでください。

★初夏の吟行会

日時 令和7年5月3日（土・祝）
場所 武蔵国分寺・国分尼寺
集合 JR西国分寺駅南口 10時10分
句会場 都立多摩図書館
（詳細は別紙をご覧ください。）

★会員の現況（3月末現在）

215名（正会員169名・一般会員46名）

☆新入会員 3名（敬称略） *印は正会員

*齋木和俊（立川市）

村山恭子（岐阜県揖斐郡池田町）

小川紅子（三鷹市）

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料（新規入会の方は申し込み手続きが必要）。

その他一般の方は年会費2千円です。

お問合せ、ご連絡は事務局（下欄枠内）まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

青木 隆（隆） 満田 光生（光）

飛永百合子（百） 永井 潮（潮）

◇◇◇ご案内◇◇◇

俳句研究会

第5回 5月24日（土）

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

（はがき地図参照）

電話042・529・8682

第6回 6月28日（土）

立川市子ども未来センター

第7回 7月26日（土）

立川市子ども未来センター

（いずれも会費千円、出句三句）

○初めての方歓迎、見学も自由です。

新役員紹介

経理部…小川紅子 事業部…広井和之

広報部…櫻さとし

原稿送り先について

「あけぼの集」の葉書の送り先と「二句鑑賞」原稿の送り先は共に青木隆さんです。

郵便料金が令和6年10月から変わり、葉書の切手は85円になりました。貼り間違えのないようお願いいたします。

句や原稿はメールでもお受けします。アドレスは、

tamanoakebono@googlegroups.com

編集後記

☆あけぼの集投句および一句鑑賞文寄稿ありがとうございました。メールは横書きで大丈夫です。またFAX（0426362272）の書式は自由で便箋や一般用紙で結構です。（隆）☆郷里会津は今冬六十数年ぶりの豪雪。一月二月と帰省し3m余の雪の壁と格闘。だが三月半ばには殆ど積雪なし。近年の気象は極端だ。歳時記と現実との乖離が加速している。（光）☆一句鑑賞の原稿を依頼する方のリストアップを担当しています。号を挟んでお願いしていますが、選んでも選ばれてもしっかり読むことになります。よろしくお願い致します。（百）☆今回多くの方から一句鑑賞文を頂きました。もう一つのお願いは、字数を本文6行以内にして頂きたい。偶に数行オーバーした原稿が来ますが、申し訳なく思いつつ切り詰めています。次号は総会と陽春句会の報告です。（潮）

―題字は三橋敏雄氏―

令和七年四月三十日発行

発行人 水野星間

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-107

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemono@ybone.jp

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 042-6262026